

連載 書写ってこんなにも面白い！ 25

筆順は、そんなに大切なもの？

山梨大学教授 宮澤 正明

文字指導、書写指導で必ず行われるのが「筆順（書き順）」指導です。文字を字形として実現化するために、その文字を構成する点画をほぼ決められた順に従って書きますが、この順序を「筆順」と言います。筆順指導は新出漢字を学習する際に行うのが一般的ですが、それだと筆順の原則が系統的に理解しにくい

ため、筆順だけを取り立てて指導する場合があります。小学校における筆順の原則や基準は、昭和三十三年三月文部省から発行された「筆順指導の手びき」を拠り所としています。また、伝統的に書き継がれてきた、あるいは一般社会で通用している筆順を、常識を越えない範囲で加えることもあります。とはいえ、文字の学習段階にある小学校での筆順指導では、一文字に複数の筆順があっても正しいとする指導は学習者に混乱をきたすため、一文字一筆順として指導するのが一般的です。

書写における筆順と字形とのかかり

さて、新出漢字指導における筆順指導では、点画に数字をつけたり、色分けしたりするなど、さまざまな示し方で理解させ

る学生が、生い茂った葉の状態を左から右へ、そして幹、最後の地平線も左から右へと描き進めます。この実験結果から、これらの動植物の絵を描く順序は、左から右へ、上から下への順序となります。右を向く動物を描く学生もありますが、後から聞くと左利きである場合がほとんどです。

この結果を見る限り、筆順の大原則とほとんど一致しており、文字であれ絵であれ、右手で何かを書く（描く）場合、左から右へ、上から下へという流れが自然であることを示しています。そのことに学生は当然気がつくしますので、次のように述べます。

「筆順には原則があるからそれに従わなければならないと考え

るのではなく、元となる原理的なものが存在し、それが機能的・合理的な原則を生んできたのではないかと考えるべきであ

ろう。では、その原理的なものとはいったい何だろうか」と。すると学生は、「右手で書くからだ」と即答します。

また、筆順と字形とが密接な関係にあることを理解してもらうために、次のような実験も行います。

実験③ 「右」「左」の一画目を、横画から書いてください。続いて、両字とも一画目を左払いから書いてください。実験④ 「原」「成」を、いつも書いているように書いてください。続いて、一・二画目をいつも書いている順序とは逆に書いてください。

実験③では、一画目を横画から書くと、横画が短く次の左払いが長めに書かれます。左払いから書くとその逆の現象が起こります。この結果から何がわかるかを学生に考えてもらおうと、「先に書く方が短くなる」という答えが返ってきます。

実験④では、それぞれの文字の一・二画目の接し方を比較し

るのが一般的ですが、書写における筆順指導では、単に点画を書く順番を示すだけでなく、筆順の原則をはじめ、筆順と字形とがどうかかわるのかを指導することになります。

まず、筆順の原則ですが、「筆順指導の手びき」から、原則とその文字例を抜粋してみます。

大原則1	上から下へ	三 工 喜
大原則2	左から右へ	川 竹 湖
原則1	横画がさき	十 共 用
原則2	横画があと	田 王 生
原則3	中がさき	小 業 楽
原則4	外側がさき	国 同 司
原則5	左払いがさき	文 人 金
原則6	つらぬく縦画は最後	中 車 平
原則7	つらぬく横画は最後	女 子 母
原則8	横画と左払い	右有 左友

大原則1・2は、筆順を知っている者からすれば当たり前ののですが、この原則はどこから導き出されたのでしょうか。わたしは、それを大学生に理解してもらうために、次のような実験をしています。

実験① 自分の好きな四本足の動物（犬・猫など）を、横向きにしてシンプルに描いてください。

実験② 大きな木の幹と生い茂った葉、そして地平線をシンプルに描いてください。

実験①では、ほとんどの学生が、左に頭部、右に尾の順で描き、次に前足、後ろ足の順に描きます。実験②でも、ほとんど

ます。すると、先に書く画の始筆が外に出ていることに気づきます。始筆相互が接する場合、先に書く画の始筆が外に出るということが実感できるのです。

このように、筆順が、字形を整えるための要素である画の長短・接し方に影響を与えていることに学生は驚くのですが、ここで重要なのは、筆順が単に文字の点画を書く順序というだけでなく、それぞれの文字固有の整った字形を形成するための大きな鍵を握っているということなのです。

まとめとして

これまで、書写の学習指導の多くは、「（いわゆる）手本をひたすら真似て書くこと」を目ざして行われてきたように思います。この方法や手本の存在を否定するものではありませんが、ややもすると字形の完成度の高さのみが重視され、書写本来の目的である「文字を書く過程（書字過程）の習得」には意識が向きにくくなります。

書写力育成にあたっては、文字の外形・中心のように、字形を図形として視覚的に捉え、物の形の再現能力や図形認識力を育成する一側面があることを忘れてはなりません。それを踏まえながらも、点画を適切に書き進めながら字形を生成し実現化するといった書字過程を中心に据えた「書字運動能力」の育成が必要であると考えます。その一つとして、今回取り上げた「筆順」はもっとクローズアップされてしるべきであり、さらに今までの視点とは異なる取り上げ方が必要になるのではないのでしょうか。書写力を日常に生かすためにも、書写の学習指導方法は変身を遂げなければなりません。